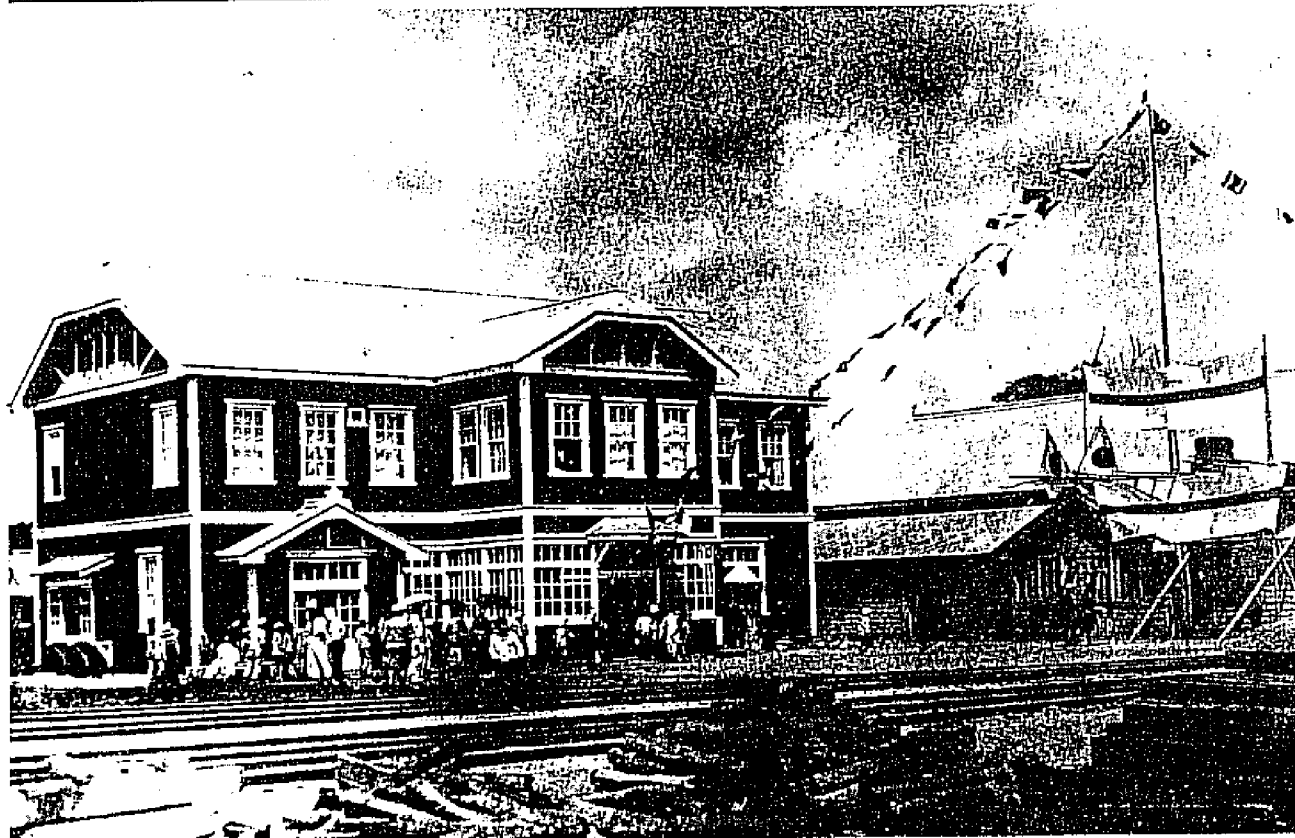


中標津町郷土館だより

第9号

発行 平成8年3月31日
発行所 中標津町教育委員会
標津郡中標津町丸山
2丁目22番地
電話 01537-3-3111



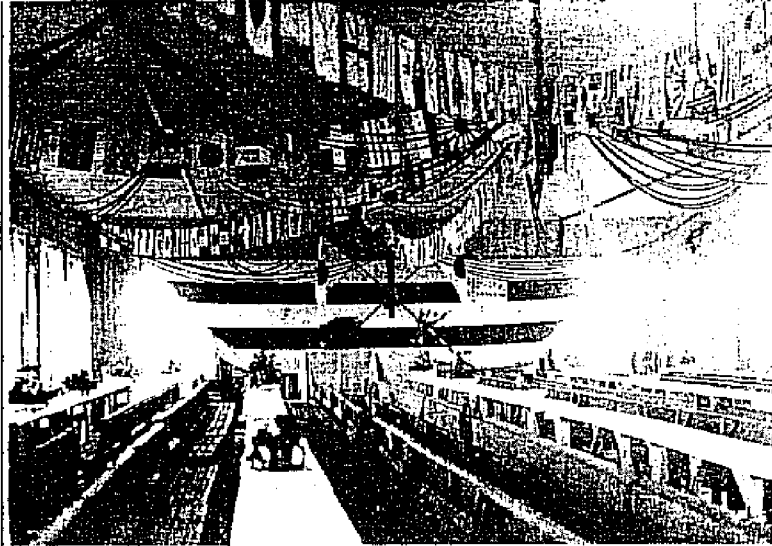
保証責任標津殖民地信用購買販売組合事務所新築落成式 【写真①】

この写真は、現在の農協の前身の一つである「保証責任標津殖民地信用購買販売組合」事務所の新築落成式の日（昭和9年8月9日）に撮影されたものです。

写真を見ると、建物は当時としては珍しい2階建てであり、大変立派なものであったことがわかります。また、10月に開通予定の旧国鉄駅のすぐ近くにあったため（東3南1、現在の日本通運㈱さん付近）、建物の前には線路や枕木等が積んであるのが見えます。

なお、この写真が撮影された午前中までは快晴だったのですが、昼過ぎから急に暗雲がたれこめかと思うと、いきなりゴルフボール大のヒョウ（雹）が降ってきたため農作物は大被害を受けたそうです

～次のページへつづく～



⇐ 【写 真 ②】

この写真もやはり落成式の日
に撮影されたものです。

場所は前ページの建物の2
階にあった会議室です。

日の丸と万国旗が見えま
すし、テーブルには花が飾られ
ていて落成式の雰囲気伝わっ
てきます。

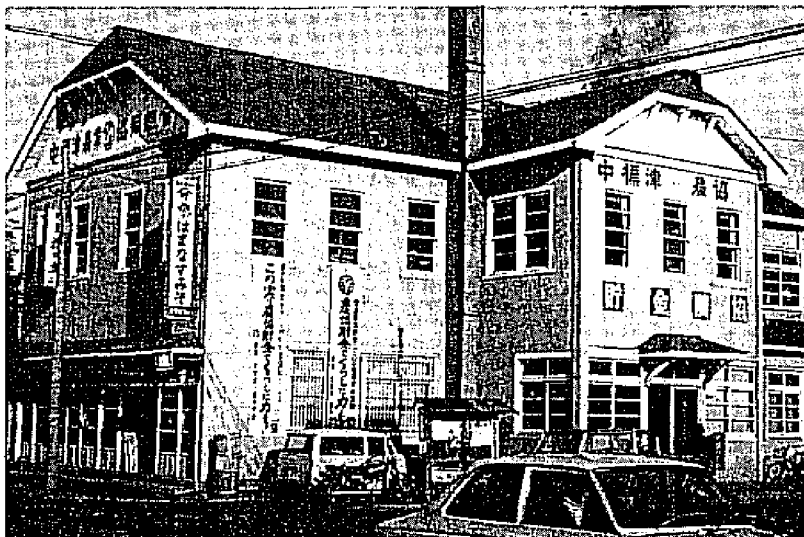
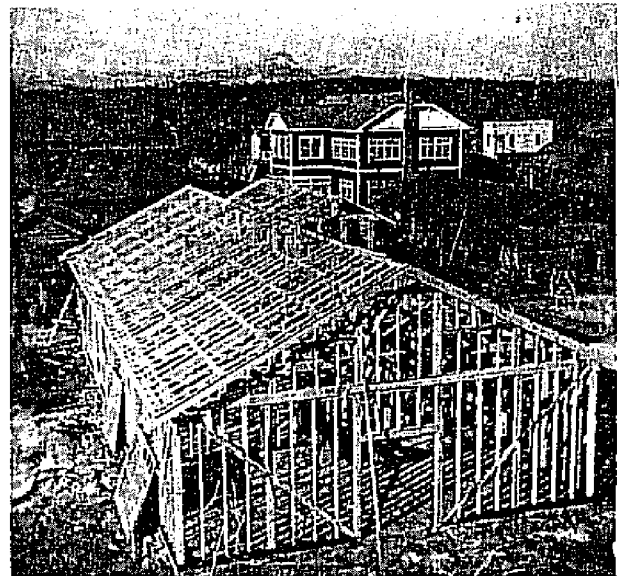
【写 真 ③】



昭和26年になると建物は東4南
1へ移築（現在は北洋相互銀行が
ある場所）されました。

昭和27年3年4日に発生した十
勝沖地震の際には煙突が折れ、手
前の共済組合住宅に倒れるという
事もありました。

建物のかなたにはうっすらと武
佐岳が見えます。

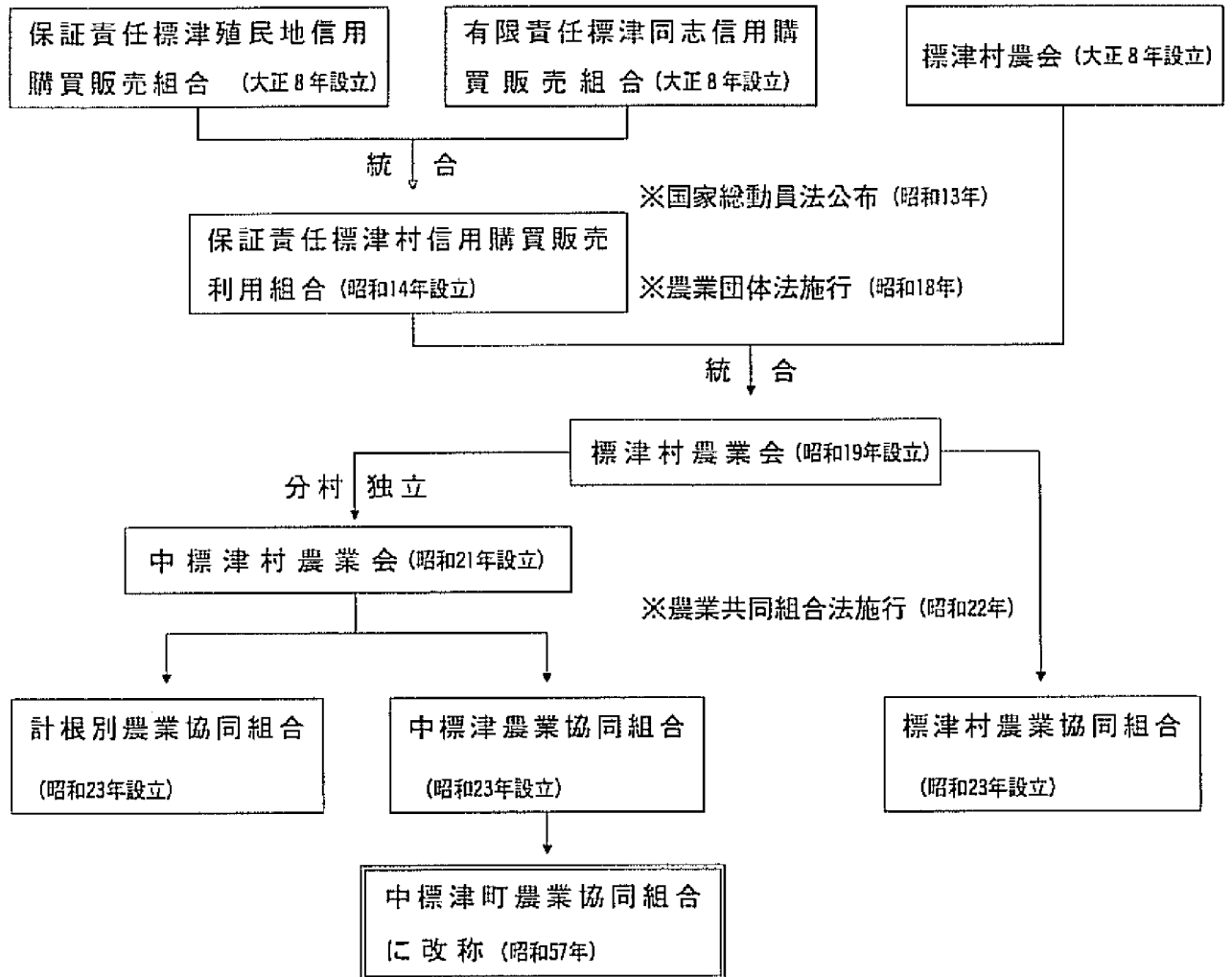


⇐ 【写 真 ③】

移築されたあと改装され
て事務所兼店舗となりました。

現在の農協の事務所が建
設（昭和46年）されるまで
使われました。

産業組合からの現在の農協になるまでの流れ



←【写 真⑤】

写真③で触れたように、昭和27年3月4日の午前10時23分に発生した十勝沖地震で（中標津町は震度5の強震）、集合煙突が共済組合の住宅に倒壊した時の写真です。

さいわいにも人命に支障はなかったそうです。

～参考文献～

- ・『中標津農協三十年史』、中標津農業協同組合、1978年
- ・『中標津町史』、中標津町、1978年

中標津町の地名

・俣 落（またおち）

俣落川からつけられた地名。もともとはアイヌ語です。『永田方正地名解』には「冬居川、此川「メム」三箇所アリテ鮭多し冬日も亦滞留スルコトアリ故に名ク或「アイヌ」ハ「マタオチ」ト云ウハ訛ナリ」とあって、この解釈をとる人が多いようです。

昔は鮭が多く上がったという話を聞きますが、メム（水の湧いている所）が三ヶ所あるということはわかっておりません。

「マタ」は冬のことであり「オチ」を「オツ」とすれば「オツ」は“群在する”つまり“ごちゃごちゃ”いるという意味になります。「前の語が名詞であると「……群在する」という意味で動詞に続けば「いつもそこで……する」の意になる。」（知里真志・『地名アイヌ語小辞典』・昭和31年）。「マタ」は、冬という名詞であるから、訳すと「冬が群在する。冬がごちゃごちゃいる」となります。「マタオチ」だけでは冬に何が群在していたかわかりませんが、冬にたくさん鮭がいたと解釈したものかもしれません。



【俣落チャシ跡】

中標津町内で 見られる蝶(7)

・コヒオドシ（タテハチョウ科）

本州では亜高山帯に生息しているため、高山蝶の仲間入りをしていますが、本州より寒い北海道では平地においても見ることができます。

年に1回（6月下旬～7月）羽化し、成虫のまま冬を越します。冬を越した蝶は3月後半から再び活動を始め、中には6月後半まで生き延びるものもいるそうです。産卵はイラクサの仲間であるホソバイラクサやエゾイラクサなどの葉の裏に100～200個かためて行われます。幼虫は集団で生活しますが、成長するにつれて分散していき、サナギになる直前には1匹づつになり、食草からはなれて近くのササやヨモギなど移動し、サナギになります。

町内でも緑ヶ丘森林公園をはじめ、人家の庭先にくることもあり、比較的目にすることの多い蝶といえます。



（『北海道の蝶』、永盛拓行他、北海道新聞社）

—参考文献—

- ・『北海道の昆虫』、北海道新聞社、1979
- ・『北海道の蝶』、北海道新聞社、1986

！道東地方の昔話！

「阿寒岳と魔神」

世界中をイタズラして歩く魔神が、雷神のカンナカムイに追われて逃げまわった末に、雌阿寒岳まで来てやっと隠してもらった。魔神はそこで1年半くらいも隠れていたが、いつも雷神が近くをゴロゴロとまわって歩くので、とうとうたまりかねて雌阿寒岳のふもとから飛び出した。するとすぐに雷神に見つかったため、魔神は雲のような白いものを頭にかぶり、それを翼にしてバタバタと羽ばたいて逃げだした。どんどん逃げ続け、アプタヌプリに隠してもらうつもりで、頭をつこんだところ、後ろから雷神が投げたヤリが飛んで来て、それが魔神にあたらず山にささったのでアプタヌプリが爆発してしまったのだという。

それから何年かたって、またまた魔神が雌阿寒岳の近くにあらわれたところ、今度も雷神に見つかったので、あわてて阿寒川のルチシというところから土の中にもぐり、阿寒湖の近くのオオコツに出てみると、なおも雷神の追ってくる音がするので、雌阿寒の下へもぐり込むつもりだったが、岩が多くて頭を突っ込むことができずにまごまごしているところへ、後ろから雷神がヤリを投げつけた。しかし、今度もヤリは魔神にあたらずに、すぐ横にあった小山にささってしまった。いきなりヤリをさされた小山は泣きながら、雌阿寒岳の上に涙の大雨を降らせて、阿寒の山から見えないほど遠くへ飛びさ

り、北海道をはなれた海の中にいてそこへ立った。その小山は現在の利尻島であるといい、小山の抜けていったあとはリクントーという今のペンケ沼になってしまった。

そしてこの騒ぎのどさくさの間に魔神はどこかの土の中へもぐってしまい、そのゆくえは分からなくなってしまったという。（足寄町 小谷吉松老談）

【1971年、『アイヌ伝説集』

更科源蔵編著、北書房版より要約】

— 編集後記 —

今回の第9号から小中学生のみなさん全員にお届けできることになりました。これからも読みやすく、わかりやすい内容を心がけていきたいと思っています。

年度末のお忙しいなか、原稿をお寄せ頂いた皆様にお礼申し上げます。（山宮記）

中標津町郷土館及び分館案内図

